

氏 名	ティナ ベセリノヴァ ペネワ Tina Vesselinova Peneva
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 416 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	The invention of Wagyu beef and contemporary meat-eating practices in Japan : An anthropological study of Omi beef production and consumption (現代日本における食肉文化と「和牛」という「創られた伝統」：近江牛の生産と消費についての研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 雅 一 教 授 山 田 孝 子 教 授 末 原 達 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文の目的は、日本における和牛をめぐる食文化について文化人類学的視点から考察を加えることである。本論文は6章からなる。第1章「序論」は、食文化の文化人類学的研究をまとめ、本論文の位置づけを明らかにしている。第2章は、肉食と牛肉食の歴史、第3章は、和牛、とくに近江牛とその生産地である近江八幡についての概略、近江和牛の生産過程を扱う。第4章では、近江和牛の販売ならびに消費過程、消費者の意見などが順に取り上げられ、第5章では、牛肉の生産や消費に関わる人々の周縁的な社会的地位についての考察がなされている。そして第6章「結論」が続く。

現代日本の食文化で特別な文化的価値を有する食材のひとつに和牛がある。本論文の目的は、それが「創られた伝統」であることを明らかにし、その上で、その伝統がいかに「創られてきた」か、また、「創られた伝統」がいかに当然視されてきたか、そしてそれにはどのような社会的意味があるのかということ明らかにしようとするものである。

和牛の「発明あるいは創出」には二つの契機があると考えられる。ひとつは、明治時代に始まる日本の近代化（西欧化）と密接に関係する「肉食」推進政策である。肉を食べることで西欧人なみの体力を獲得し、それが結果として富国強兵につながると明治政府は考えた。もうひとつは、第二次世界大戦後、とくに高度成長期に肉の品質へのこだわりと、そこから生じた高価格化などを背景として生まれた「和牛」のブランド化である。こうして、食材としての和牛に特別な地位が付与された（第2章）。

本論文は、滋賀県の近江牛を事例として、複雑に組織化された和牛の飼育の各段階について調査を行っている。近江牛は、地域間の競争と人びとの「生活の必要」という時代の流れの中で誕生し発展していった。近江の「名産」である近江牛は、ほかの地域で生まれた和牛（たとえば松坂牛）と競合関係にある。他方、それは和牛ブランドのひとつとして外国人にとって日本を表象する牛肉でもある（第3章）。

和牛の消費に関して言えば、その特徴は以下のとおりである。和牛は、高価なため日常的に消費される肉とは区別される特別な食材として、祝い事などで家庭や有名レストランで消費されてきた。また、和牛は贈答品や観光地での土産品として消費されてきた。しかし、どのような消費・流通経路であっても、それを口にする消費者は、和牛に対する知識を、ブランド名をヒントにメディアや世間の評判から獲得し、その知識を自身の「味覚」によって確認する。そしてそれが、再びメディアや世論に還元され、人びとの知識が再帰的に補強されている。まず、ブランドとそれを取りまく言説が存在するのである。そして、味覚という個人的な感覚は、かならずしも和牛の評価において中心的な役割を果たしてはいないのである（以上第4章）。

最後に、本論文では牛肉一般をめぐる社会的な問題に触れている。たとえば、焼き肉とホルモンは、もともと在日韓国・朝鮮人の食文化に由来する。さらに、牛肉の生産や流通上無視できないことがらに被差別部落民問題がある。和牛は、一方でナショナルな文化産物へと変貌したが、他方で、日本社会で周縁に位置する人びとと密接に関係するのである。また、肉

食は最近になって健康上よくないと指摘されてきた。このため食肉関係の団体が女優などを使って肉食推進キャンペーンを行っている。

本論文は、和牛が代表的な日本文化の一翼を担うことになるという国民文化化の過程を詳述する一方で、和牛を中核とする肉食文化が穢れや不健康など、負の価値と結びついてきた事実を指摘する。では、この正と負の価値はどのように結びついているのか。現代日本社会は、肉食文化に認められる負の側面を隠蔽し、ホルモンと焼き肉を「グルメ」あるいは「高級な食事」へとたくみに変容させた。ホルモンは、その語源が関西弁の「ほおるもん（捨てるもの）」であるという俗説があるように、「価値のないもの」から「流行の消費財」へと新たな価値観を付与されて、日本を代表する食材のひとつになった。しかし、そのような流行に注目するだけでは、日本社会の周縁に位置する人びとへの関心や共感は生まれてこない（第5章）。

本論文で提唱する「食文化の人類学」は、流行を歴史的变化としてたどることを課題とするのではない。そこに隠蔽されている在日韓国・朝鮮人や被差別部落民といった「他者性」に注目し、現代日本社会の周縁に作用する権力のあり方へと考察を深めることにこそ、食文化の人類学の可能性が認められると本論文は結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、和牛が高価な食材となった歴史的、社会的要因を明らかにすると同時に、それがもつ意味を現代日本社会の文脈において明らかにしようとしている。本論文の独創性は以下の4点にある。

本論文は、日本人にとって見過ごされがちな日常的な慣習に注目し、そこから近代日本の歴史、さらには現代日本の社会構造にまで議論を展開しているという点で、きわめて独創的な視点を持つ。ここで研究対象となっている日常的な慣習は牛肉食である。言うまでもなく、牛肉の摂取が普及し始めるのは明治時代になってからである。戦後の高度成長期を経て、牛肉は日本人の食卓に欠かせない食材へと変貌した。西欧社会と結び付けられて理解されていた牛肉食にあって、きわめて特異な位置を占めるのが和牛である。和牛とは日本特産の牛、あるいは牛肉を意味するが、歴史的に考えるとそれはきわめて矛盾する。そこに申請者は注目し、和牛を「伝統の創出」の一事例とみなす。そして、和牛の意味を問う。こうしたまなざしは、文化人類学者につねに要請されるものではあるが、こと自文化については、見慣れたものとして、見過ごしてしまうのが現実である。申請者は留学生として、日本人にとって当たり前と思われる慣習を奇妙なものと感じ、そこから歴史学的かつ文化人類学的な分析を通じて独創的な研究を達成した。

食文化研究は、文化人類学およびその隣接分野では伝統的に存在していた。しかし、その多くが調理される食材や料理を研究対象の中核に置いてきた。そして、それらがどのような地域に分布しているのかといった文化圏の指標として注目されてきた。それは、真の食文化研究とは言えない。なぜなら食材や料理はあくまで文化圏の理解に従属しているからである。これに対し、本論文は、和牛を含む牛肉食の食文化を、肉牛の生産から流通、消費、広告（表象）など、トータルにとらえて考察をしている。しかも、その各々において、緻密なフィールドワークを実施することで、あまり知られていない和牛をめぐる食文化の実態に迫っている。伝統的な食文化研究からすれば、和牛は伝統的な食材ではないという意味で無視されてきた。

それに対して、本論文は、それにもかかわらず多くの日本人が和牛を日本特有の伝統食材とみなしている、ということに興味を抱き、そこから日本社会の特異性を考察している。ここに申請者の繊細かつ鋭い視点を見て取ることが可能である。本論文は、食文化の研究とは伝統的な食文化を取り上げるべきである、といった想定に対する批判となっている。今後は、洋食やマクドナルドなどのファーストフードの研究が増えてきてもおかしくないであろうし、そうした研究こそ重要なのだということを本論文は雄弁に語っている。さらに本論文は、牛肉に着目することで、日本食といえば米と魚（海産物）というステレオタイプ化した日本食のイメージを大きく変えることに成功している。

現代日本社会を扱う外国人研究者による文化人類学的研究は大きく二つに分かれる。ひとつは、伝統的と思われる日本社会や文化を研究することで日本文化の理解を深めようとする方向である。もうひとつは、世界が注目する日本のサブカルチャーを研究対象とする方向である。後者はまだ多くはないが、原宿のファッション、フィットネスクラブ、コスプレなどを対象とする研究が増えつつある。この二つは、残念ながら交わることはない。これに対し、本論文は現代日本社会を象徴す

る消費主義，グルメ文化の産物として和牛を位置づけることで，伝統か現代かという二つの研究方向を統合するような視点を提示している。

最後に，本論文は肉食に関わる人々の周縁的位置に注目し，現代日本社会が抱える差別問題，具体的には在日韓国・朝鮮人差別と被差別部落民差別を取り上げている。申請者も強調しているように，一見華やかな和牛ブームに隠蔽されてきた，こうした差別構造を研究対象にしている点で，食文化，そしてそれを一部とするような消費文化研究の新たな展開が期待できる。

以上のように本論文は理論的にも独創性に満ちた一級の民族誌であるという点で審査員の意見が一致した。本研究科，共生文明学専攻，文化・地域環境論講座は，文明相互の共生を可能にする方策を探求するために創設されたが，その設置目的にふさわしい内容をそなえたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成20年2月7日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。